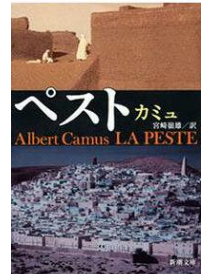


## 明治後期「大阪のペスト流行」

コロナ禍で外出自粛が求められる中、カミュ『ペスト』を読んだ。歴史から学ぼうと、『新修大阪市史』第6巻を手にとると、「大災害の発生」冒頭に、明治後期のペスト流行が書かれていたので抜粋して紹介したい。

明治前半期にはコレラが流行し、大きな社会不安となったが、明治後期にも伝染病が大阪で猛威を振るった。大阪においても日露戦争を挟んで、明治32-33年と38-39年の二度にわたってペストが大流行した。ペストは黒死病とも呼ばれ、ヨーロッパでは大流行した例があるが、日本ではなかった。日本でペスト患者が出たのは、29年(1896)に香港から横浜に入港した船によってである。



当時の医学は細菌学の進歩がみられ、27年に北里柴三郎とフランスのエルザンがペスト菌を発見している。ペスト菌はネズミ・ノミを媒介とするもので、まずネズミにペストが広がり、その後2、3週間を経て人間に感染し、発病してから数時間ないし2、3日で死亡した(『大阪市立桃山病院百年史』)。

32年11月18日、内務省はペスト予防のため、ペスト患者が発生している清国・インドからの、ぼろ・古綿の輸入を禁じたが、その日に大阪市最初のペスト患者が発生した。患者は13歳の少女であったが、最初は単なる風邪と思われたが、高熱が続くので医師に見せたところペストと診断され、すぐに桃山病院へ収容されたが5時間後に死亡した。大阪府臨検部の調査では、少女がよく行く家の横に屑綿倉庫があり、その中にペスト菌を持ったネズミの死骸を発見したことから、ここが感染経路とみられた。同年中の発病は41人を数え、39人が死亡した。続く33年にも122人が発病し、うち118人が死亡している。ペストは死亡率が高く、当時はまだ治療法も確立していなかったため発病すればほとんどが死に至り、回復するのはまれであった(同)。

ペストの第2回の流行が38年から43年まで続いた。大阪市内ではこの間に延べ965人が罹患し、そのうち865人が死亡した。死亡率は88.7%である。特に40年は、患者数561人、うち死亡509人となっていて格段に多かった(同)。ペスト患者と接触した者や関係者は、白い頭巾と眼鏡を着用し、長い白衣にゴム長靴・ゴム手袋という服装でペストの感染を防いだ。治療に当たる者の感染もあり、39年10月には桃山病院の石川順二郎医師がペストに感染して殉職した(同)。石川医師はペストについての論文を執筆し、その直後に感染したのである。

大阪市はペストを媒介するネズミを駆除するため、32年の流行する際、12月18日皿ネズミの買い上げを実施した。このネズミ買い上げは第2回目の流行の際にも行われ、初めは142銭であったが、流行が激しくなってくると値上げも行われた。

(2020年5月3日)